

手指関節拘縮の改善を目指して —セラミックハンドロールの効果の検証 第2報—

○片江 真梨子¹、大田 延枝¹、畠 弥生¹、久内 文¹、片岡 恵美子¹、
八木 良子¹、本多 和成²、梶谷 伸顕²、萬代 眞哉²、衣笠 和孜²

¹独立行政法人自動車事故対策機構 岡山療護センター 看護部、

²独立行政法人自動車事故対策機構 岡山療護センター 診療部

【目的】 前回我々は、手指関節拘縮に対するセラミックハンドロールの有効性を報告したが、今回は、プラスチックハンドロールと比較し、関節拘縮の改善効果を検討したので報告する。

【対象・方法】 手指に拘縮をきたしている患者9名を対象に、プラスチックボール群（以下A群）5名7手、セラミックボール群（以下B群）4名7手に分ける。同じ筒状の綿布の袋にプラスチックボールあるいはセラミックボールを入れてハンドロールを作成し、4週間使用。開始前・終了時に、第3・4指から手掌までの距離と手指14関節（母指MP・IPと第2～5指のMP・PIP・DIP）の関節可動域を測定し評価する。また可能な症例では2週間でハンドロールのサイズアップを行う。

【結果】 A群では第3・4指から手掌までの距離は変化がなかったが、B群は第3指平均1.77cm、第4指平均2.46cm拡大した。屈曲可動域は、A群では改善が3関節、悪化が10関節、B群では改善が7関節、悪化が3関節であった。A群は改善がMP関節にとどまっていたが、B群は全体的に改善があった。伸展可動域では、A群は改善が11関節、悪化が2関節、B群では改善が12関節、悪化はなかった。A群1手、B群は7手（全対象者）でハンドロールのサイズアップをすることが出来た。

【考察】 セラミックハンドロール群の方が拘縮の改善度が高かった理由として、プラスチックにはない、セラミックの遠赤外線効果が手指の深部血流の改善を促し、疼痛や緊張の緩和、リラックス効果をひき起こしたことなどが考えられる。